

中田かわら版 9 月号

～中田地区の地域活動をお知らせします～

発行：中田地区経営委員会

協力：中田連合自治会 泉区役所

制作：中田かわら版制作編集委員会

横浜市踊場地域ケアプラザ

■人生百歳時代に生きる<5>

95 歳の達人 波田野榮子さん

「宮の台の元気母さん」

長寿は珍しくない昨今、健康長寿そのもの 96 歳を目前にして自転車を取り回している方をご紹介したい。元気の素は何だろうと話を伺った。

波田野榮子さんは 90 歳近くまで宮の台市民の森の愛護会にも所属し、道路添いの斜面を自前のエンジン式刈り払い機で草刈りを続けていた。「思い出すと結構面白かった。たいへんだけどね。60 歳代半ばから 10 年ほどは民生委員をやりましたが、奥津喬雄さんや小山お代官さん等から頼まれて保護司もやりました。断る間もなく・・・でした。今では良い思い出です。でも保護司は生半可な気持ちではできません。90 歳過ぎた頃から息子達がやかましく言うし、最近自転車のタイヤサイズを今までより小さい 24 インチに代えたの。両足が地面に届くから安心だし自転車は楽よ！」口調も軽快だ。



住いは中田北 3 丁目の通称宮の台。昭和 2 年福島県喜多方市の生れ、10 月には 96 歳になる。娘時代はずっと戦中だった。県立女子高等学校では卓球部に所属、県大会で優勝し県代表になったけれど昭和 19 年戦争が激しくなり、神宮大会が中止になってしまったのが残念と言えば残念。(神宮大会は今の国体の前身で、明治神宮に競技を奉納すると言う意味があったようです。)

昭和 25 年結婚、1 男 1 女をもうけた。ご主人は山形大学工学部卒、東京電力で火力発電所の建設に従事した。12 年前の福島原発の事故は知らずに亡くなった。戦時中は所属の広島部隊が 8 月 5 日（原爆投下前日）偶然芸備線で 2 時間ほどの所に移動した為わずか半日ほどの差で難を逃れた。以降戦友の霊に恥じぬ様身を律して生きてきた。また宮の台会館ができたとき初代館長を務められた。「とんでもない暑い夏、新聞テレビが毎日々々危険な暑さと叫んでいるけど、私は毎日畑に出てるよ。早朝か夕方の方のどちらかで。植物には命があるの植えた者の責任があるの。だから水やり、草取りは欠かせない。水運



びはさすがに自転車では無理、ポリタンクを手押し車で運ぶ。片道約 350m 有るけれど、幸い行きはやや下りだし帰りは空荷だからなんとか運べているの。生きている間は畑と暮らす、暁の上の方が良いけど畑で死ねたら本望かなア」コロナの間は世間の言うとおりの手洗い、マスクとうがいにはきちんと守った。コロナワクチンは 6 回目も済んだ。ワクチンでは熱なし、痛みなし、もともと風邪なんて引いたことがない。これまで白内障手術の時以外に入院したことは無いそうだ。それでもお医者さんには定期検診を受け減塩に努めお酢入りの水でのうがいを欠かさない。やるべきことはやっている。「強いて言えばこれが私の健康法かも」いやはや羽田野さんには脱帽である。

(河内 満明)

■「中田むかしの話」＜5＞

中田のお殿様「石巻康敬のこと」（下）

元泉区歴史の会会長 宮本 忠直著

石巻康敬が中田で蟄居生活に入ったのは 57 歳のころ。江戸幕府が編纂した「寛政重修くちょうしゅう」諸家譜によると、それからすぐの文禄 4 年（1595）頃、内田与左衛門の娘を娶り長男「康貞」を出生している。

この康貞が以降石巻家の本家筋となり、慶長 18 年（1613）に康敬が他界すると康貞がその遺跡を継いだ。御納戸番からやがて御納戸頭に就任、若年寄で御納戸衆や同心など 90 人余りを取り仕切る役職である。禄高も六百八十石に加増されて徳川幕府、旗本の一家となり、以下康元—康宗—泰久—康隆—康福—康由—栄吉と続く。



ところで徳川家康から石巻康敬を預かってくれと頼まれたのは中田のどこの誰だったのか。小田原北条氏の評定衆を務めた人物の屋敷を用意し、警護を整えて迎え入れるのだから地元では大きな出来事であったと思われる。しかし記録も無く、何処の誰かも全く分からない。

そこで推測されるのは、天正 18 年（1590）7 月 5 日の小田原落城後から蟄居が解かれ中田の領主として過ごし、慶長 18 年（1613）10 月 1 日 80 歳でこの地に没するまでの、20 数年間過ごした石巻康敬の陣屋は、御霊神社や中田寺の近辺または石巻康敬が持仏として、深く信仰していた十一面観音を祀る



「観音堂」のあった墓の近くが考えられる。

石巻康敬は御霊神社を崇敬し、中田寺の鎮守として再興し、同寺の開祖となっている。村民から中田のお殿様と敬愛され村の発展に寄与したといわれる。

康敬は中田の石巻館で波乱に満ちた 80 年の生涯を閉じる。法名幼庵。

「至徳院殿信譽欽翁宋喜大居士」の位牌は中田寺に安置されている。

＜付記＞ 宮本先生（令和 4 年 3 月逝去）が生前、私に言ったことがある。

「石巻さんが中田に蟄居した時、当然随行者がいたはず。最近、それがやっと分かったんだ。御霊神社の近くに住む〇〇家ということがね」。

なお、文中にある「観音堂」（現在は中田寺に移転）とは現在の石巻の墓地あたりで「相模風土記稿」に十一面観音を置く。「稲葉堂」と号す。とある。

編著 宮田貞夫

編集後記

小紙 6 月、7 月号に連載された「中田発明クラブ」の話は分かりやすく、素晴らしいクラブの紹介だった。ところで、会の生みの親と言えば当時、池谷自治会の会長だった瀧沢一男さんが全国発明協会の常務理事をされていた関係で、「こども発明クラブ」の中田への誘致が一早く提案された。設立に際し中田連合会長の奥津喬雄さんに相談、青少年指導員会長の小山栄次さんや専任指導員らの協力で会が発足し多くに実績を残し現在に至っている。なお、設立当初から一貫して会を支えてきた佐藤 久、渡辺美智子さんら二人の功労者も忘れてはならないだろう。

（宮田貞夫）

◎発行：中田地区経営委員会「かわら版」制作編集委員会

委員長 宮田貞夫 編集長 松本 正

編集委員；山木重樹、小島敏子、田中 進、河内満明、松本純子、鈴木賀津彦、嶋 宏之

